

## シンポジウム・研究会報告

第8回若手研究者支援プログラム  
「古代日本語と『古事記』」

2012年8月24日～26日

第8回若手研究者支援プログラムを2012年8月24日から26日の3日間にわたり、奈良県立万葉文化館との共催で開催しました。古事記撰進1300年の節目を迎え、昨年の第7回「古事記と萬葉集」に引き続き、「古代日本語と『古事記』」というテーマで、上代日本語と古事記とのありようを様々な角度から再検討しました。

## 8月24日(金) 若手研究発表会

## 若手研究者による発表及び講師による公開指導

「万葉集「シノフ」考」 井口日奈(皇學館大学・院)

講師：吉井健(神戸松蔭女子学院大学)

「古事記における猿田コノ古神話の構造」

星愛美(奈良女子大学・院)

講師：石田千尋(山梨英和大学)

「石中死人歌の構成一われの視点と方法一」

茂野智大(筑波大学・院)

講師：内田賢徳(京都大学名誉教授)

司会：奥村和美(奈良女子大学)



若手研究者発表会の様子(8月24日)

それぞれの研究発表について、あらかじめ指定した講師によって公開の指導が行われました。資料の扱い方にはじまり、研究史の整理、着眼点、問題の設定、調査方法、概念規定、論理の組み立てなど、論文の書き方を具体的に発表者の論にそって御指導いただき、発表者のみならず参加した若手研究者にとっても有意義なものとなりました。学内学外の若手研究者を中心に37名参加。

## 8月25日(土)

## 公開講演会とシンポジウム「古代日本語と『古事記』」

「古事記の構想—天照大御神と鏡を中心に—」

毛利正守(皇學館大学)

「古事記はよめたか—万葉人は古事記をどうよんだのか—」

奥村悦三(奈良女子大学)

『古事記』歌謡のことば」

山口佳紀(聖心女子大学名誉教授)

司会：内田賢徳(京都大学名誉教授)

毛利氏は、古事記には、天照大御神が高天原に君臨したまま、魂としての鏡を天降らすことによって支配するという、二重の支配構造が語られていることを論じられました。奥村氏は、亀井孝論を批判継承しつつ、古事記において漢語の翻訳語或いは翻訳的表現が、日本語の中に取り込まれている諸相を解析され、山口氏は、古事記歌謡のことばを、万葉



公開シンポジウムでの討論(8月25日)

集の和歌のことばと比較することによって、その古代日本語における古層としての性格を検証されました。これらの講演をうけてシンポジウムでは、内田氏の司会のもと乾善彦氏（関西大学教授）らも交えて活発な討論が行われました。一般の方を含め、学内外の研究者ら約60名が参加。

8月26日（日）

### 臨地研究「古事記の故地」

太安万侶墓—福住の氷室—復元氷室—都祁水分神社—三陵墓古墳—大神神社—箸墓古墳

臨地説明：出田和久（奈良女子大学）

古事記に関わる人物の陵墓や神社等をバスでめぐりました。出田氏の詳細な説明をうけつつ、所々で万葉歌碑の鑑賞も行われました。若手研究者を中心に16名が参加。（奥村和美）



臨地研究のようす（8月26日）

## 研究会報告

### 古代学学術研究センター研究会

〈2011年度〉

古代を見なおす1（2011年11月28日）

#### 「古代の服飾とその素材」

榎崎 久美子（広島女学院大学）

古代の服飾について、報告者はまず10世紀初頭に編まれた『延喜式』にみえる「齋服」に着目され、それらの素材や染料、服飾品などを位職ごとに分類されました。そして、文献史料から得られたその知見と正倉院に伝わる宝物などをあわせて考察され、色味を帯びた華やかな製品が「齋服」に使用されていること、現在の神事にかかわる服飾のイメージとは必ずしも一致しないことを論じられました。

服飾史の成果に接する貴重な機会であったため、繊維製品の規格など当時の衣生活の実態に関する質問が出されるとともに、祭祀行事が実施される時期

や神の性格の相違と「齋服」の異同をめぐって議論がなされました。（西村さとみ）

古代を見なおす2（2011年12月12日）

#### 「奈良時代の解由制度」 岩村 彩子（奈良女子大学・院）

平安時代以降のそれに比して、これまでほとんど注目されることがなかった奈良時代の解由制度の目的や実態に迫ることを課題に、報告者は当該期の諸史料に加え、中国金・元代の制度をも分析の対象とされました。そして、職務全般を監察し、それを人事に活用しようとした金・元の制度は、遡って唐代にも存在したと推察され、それが日本では地方官（国司）に適用されたのではないかとの見解を示されました。

討論では、唐代にも解由制度があったとすれば、なぜ史料にみえないのか、また中国の制度を受け入れたとすれば、なぜ日本ではそれを国司にのみ適用したのかといった質問が出され、意見が交わされました。（西村）

古代を見なおす3（2012年1月18日）

#### 「和歌が詠まれるとき—中世日本紀へ—」

石黒 志保（奈良女子大学・院）

院政期後半から鎌倉初期にかけての激動の時代に生み出された多くの和歌論。報告者はそれらを既存の概念に変わる新たなことばの追求とみなし、神仏の語られかたの変化にことばと真実との関係の転換を見いだして、『新古今和歌集』の編纂にいたる和歌論の展開を描きだそうとされました。

神と和歌、仏と和歌の関係に差異はないのか、神や仏が和歌を詠む存在とされたことの意味はどこにあるのか、古いことばに新しい心を盛るといふ本歌取はなぜ提唱されたのかといった問題が議論を呼びました。（西村）

〈2012年度〉

古代のみやこを考える（2012年10月25日）

#### 「9世紀の京職財政について」

宍戸 香美（奈良女子大学博士研究員）

制度も実態も不明な点が多い京職の財政について、報告者は職写田に着目され、その運用が9世紀に入って拡大し、貞観18年（876）に停止の方針が示されたにもかかわらず、12世紀まで大規模に展開されたことを論じられました。さらに、その展開を律令財政の構造的変化の過程に位置づけることも試みられました。

職写田の研究が少ないこともあってか、なぜ不輸

租とされたのかを始めとして、その制度や運用方法に関する質問が出されるとともに、貞観18年の太政官符の解釈や歴史的意義をめぐって議論がなされました。(西村)

#### 研究会「大和の山々と飛鳥・藤原・平城京」

2012年10月5日

和田 萃 (京都教育大学名誉教授)

大和には、三輪山や葛城山のように神がいるとされ、神聖視される山々が多くありました。そして山々はまた、宮都と密接な関係を持っていました。そこで都城を考える際の1つの視点として、山々を取り上げることとし、造詣の深い和田萃氏にお話を伺いました。

和田氏は『万葉集』『古事記』『出雲国造神賀詞』などを用い、香具山・三輪山・葛城の白雲峯・吉野の弥山・飛鳥のミハ山・御蓋山・都祁の野々神岳などの、神体山や神奈備山とされた山々について詳しく解説し、また三重県伊賀市城之越遺跡にも触れて、森の中に水があるような所で神々は祭られ始めたのではないかと述べられました。(館野)

#### 研究会「福原の時代 宗教と和歌」

2012年10月28日

##### 「福原遷都と伊勢」

森 由紀恵 (日本学術振興会特別研究員)

##### 「和歌が詠まれるとき—中世日本紀へ—」

石黒 志保 (奈良女子大学・院)

福原遷都から鎌倉幕府の成立まで、既存の都・平安京が揺れ動いたこの時代を、人びとの生をささえる思想の転換期としてとらえなおすべく、2本の報告と、それをふまえた議論がなされました。

森報告では、「帝都」という語の用法、内侍所神鏡の在所とそれを要とする護持僧作法などの考察から、福原遷都がその否定というかたちで、内侍所神鏡—天照大神と天皇が居るべき「帝都」として、王の護持の中核として平安京が認識される画期になったことが論じられました。また、石黒報告は、大仏再建にあたっての伊勢参宮の記録に和歌がみられることから説きおこし、当該期の和歌論に、人も神も仏も等しく和歌を詠むと、そして、その和歌は真実を伝えると語られたことの意味を考えようとするものでした。

討論では、平清盛の諸政策における伊勢神宮の扱われかた、和歌論にみられる諸神と天照大神の差異などに関する問いが出され、両報告に共通して取り上げられた伊勢・天照大神の思想的位置が問題化されました。(西村)

#### 研究会「古代都市の環境・景観復原のための地理情報データベース構築」

2012年11月24日

河角 龍典 (立命館大学)

地理情報システム(GIS)を用いた空間的分析や詳細な3次元モデルによる視覚化を行うことで、航空機レーザー測量成果や発掘調査成果など、これまで活用が困難であった大量の地理的データから新たな知見が得られる可能性があります。本研究会では、レーザー測量による細密な標高データにより、平安宮では内裏がその前面の建物群より一段高くなるように造成されていた痕跡や、長岡京などの中軸線上にランドマークとなる山頂が存在することなどが指摘できたこと、平安京内の遺跡の埋没深度を空間的に分析した結果、過去の地形復原とその変遷が解明されたこと、発掘調査成果をGISデータベース化すれば、建物規模の分布など、遺構レベルの情報を直接参照した分析が実現できることなど、いくつかの研究事例が紹介されました。そして、これらをふまえて、GISを活用した古代都市の環境・景観復原研究の手法とその可能性についてご報告いただきました。(宮崎)

#### 古代学学術研究センター 月例研究会

本センターに参加している様々な学術分野の研究者が相互の研究内容を理解し、学際的研究を推進する基盤を作るために、月例研究会を開催しています。2011～12年度の研究会は次の通りです。(宮崎)

〈2011年度〉(回数は2010年度からの通算)

第8回(5月11日) 内藤栄

「空海はなぜ東寺を造営したのか」

第9回(6月8日) 奥村和美

「越中の立山の歌」

第10回(7月6日) 加須屋誠

「美術史学とはなんだろうか—画像解釈学の可能性—」

第11回(8月3日) 河原一樹

「古代試料中タンパク質の分析可能性」

第12回(10月5日) 植田直見

- 「出土琥珀玉の産地推定は可能か」  
 第13回(11月5日) 館野和己・出田和久  
 「西安・洛陽都城遺跡の現地調査報告―特に遺跡の復元整備状況をめぐって―」  
 第14回(12月7日) 西藤清秀  
 「パルミラ遺跡の調査 22年の軌跡―特に墓の調査を中心に―」

〈2012年度〉

- 第1回(5月9日) 宮路淳子  
 「古墳時代の動物利用」  
 第2回(6月6日) 松尾良樹  
 「『延喜式』(國史大系本)を読む―文字・句読・語彙―」  
 第3回(7月4日) 西谷地 晴美  
 「所有と依存の歴史学―第二論集「序章」覚書―」  
 第4回(8月1日) 飯田剛彦  
 「聖語蔵経巻「神護景雲二年御願経」について」  
 第5回(10月3日) 鈴木 則子  
 「病が語る生活史―江戸時代の労瘵(結核)をめぐって―」  
 第6回(10月31日) 谷口 洋  
 「中国古典文語文の成立をめぐって」  
 第7回(12月5日) 小池伸彦  
 「奈良の刀工について―考古学から見た三条小鍛冶伝承」

研究成果の発表・公開

刊行物案内

本センターの研究論集『古代学 第5号』および『都城制研究(7)』が、2012年3月に刊行されました。

古代学 5

- 「古事記の構想―天照大御神と鏡を中心に―」 毛利正守  
 「古事記はよめたか―万葉人は、『古事記』をどうよんだのか―」 奥村悦三  
 「平城京内の固有地名―その予察的検討」 館野和己  
 「古代東北城柵の政庁域の建物について」 上野邦一  
 「法隆寺伝来百萬塔をめぐる憶説」 松村淳子  
 「レバノン共和国ティールの地下墓からの分離カビ」 本村沙織・西山要一・鈴木孝仁  
 「言葉を綴った人々―丸部足人の場合―」 黒田洋子  
 「『成島道筑老御門之返書』―「古梅園造墨資料」翻刻と解題(5)―」 的場美帆

都城制研究(7)

- 「古代都城をめぐる信仰の諸形態」 館野和己  
 「古代宮都と仏教信仰」 古市 晃  
 「難波京をめぐる宗教環境」 積山 洋

- 「中国 北朝都城の祭祀空間」 村元健一  
 「古代都城と神祇祭祀」 榎村寛之  
 「古代都城と神・仏・天の祀り」 西本昌弘  
 「平泉の宗教施設と風水思想」 前川佳代  
 「古代都城と神の祭り」 鈴木明子

学際的共同研究体制に基づく  
 タンパク質考古学創成事業との連携

「学際的共同研究体制に基づくタンパク質考古学創成事業」主催、当センター共催でシンポジウムを開催しました。

膠と漆(2012年12月28日、於・奈良女子大学)

木と文化財学(2013年3月2日、於・奈良女子大学)

地域貢献に関わる活動

「文化財レスキュー応援せんと!」募金報告

2011年の東日本大震災で被災した文化財復旧事業への募金活動を行いました。ご協力下さいました皆様に御礼申し上げます。募金はすべて奈良文化財研究所の文化財復旧事業へ寄付いたします。

募金総額：14,673円

募金活動を行った研究会・シンポジウム：

- ・第8回若手研究者支援プログラム(2011年8月24～26日、於・奈良県立万葉文化館・奈良女子大学)
- ・奈良女子大学史学会大会(2011年11月23日、於・奈良女子大学)
- ・タンパク質考古学創成事業シンポジウム「膠と漆」(2012年12月8日、於・奈良女子大学)
- ・第7回都城制研究集会「古代都城と寺社」(2013年2月16日、於・奈良女子大学)
- ・第29回条里制・古代都市研究大会「紫香楽宮と大仏造立」(2013年3月2～3日 於・奈良文化財研究所 平城宮跡資料館 主催・条里制・古代都市研究会)

奈良女子大学古代学術研究センター

Newsletter No. 5

2013年3月29日発行

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 205号室

TEL/FAX：0742-20-3779

URL：http://www.nara-wu.ac.jp/kodai/index.html

e-mail：kodaigaku@cc.nara-wu.ac.jp

編集：館野和己・宮崎良美